

Vascular Street Journal



ミラノカンファレンス 2019.6.16

福岡大学心臓・血管研究所 Team Fiighting against Heart Disease (TFHD)



はじめに (朔)

毎年、欧州心臓病学会 (ESC) の際に Team Fighting against Heart Disease (TFHD: 福岡大学心臓・血管研究所) の研究会を開きますが、今回は ESC とは別の国際血栓症学会 (アテネ) にあわせて、ミラノ大学薬学部教授 Giulia Chiesa 先生の研究室を訪問しました。ミラノ大学 (Università degli Studi di Milano) は市内中央にある有名な教会「ドウオーモ」の横にあるため、その近くにホテルをとっていました。Giulia Chiesa 先生は、そこに私たちを迎えに来てくれて、まず、ドウオーモから歩いて5～6分の所にあるミラノ大学のメインキャンパスに連れて行かれました。ミラノ大学は1924年に設立され、62,000名の学生が学んでいるそうです。2万人の学生がいる福岡大学と比較しても、かなり大きな大学で、ヨーロッパでも由緒正しい高いランキングの大学です。メインキャンパスには主に文系学部があるそうですが、ここでの教育・研究は現代的な建物は必要がないとのこと、哲学や文学・法学・政治学・経済学を学ぶ石の建物でした。





＜研究室訪問＞

Giulia Chiesa 先生の研究室は、市内の中央部(ドウオーモ)から車で20分ほど北にあるので、タクシーで彼女の研究室に行きました。以前は内分泌学の研究所として有名だったそうですが、今はミラノ大学の薬学部となり、ユウロのセンターオブエクセレンス (COE) に選ばれた研究所です。福岡大学医学部と比較しても古い建物ですが、一般に医系の研究室はこのようなものですね。

Giulia Chiesa 先生の教授室は、私たち福岡大学医学部の教授室よりは小さいかもしれませんが、ここから偉大な HDL 代謝に関する研究がでていいます。やはり、研究はハードではなく、ハートでやらないといけませんね。



Giulia Chiesa 先生の前任の教授は、国際動脈硬化学会、米国心臓病学会 (AHA) などの脂質部門で一世を風靡した C. R. Sirtori 教授ですが、今も彼の部屋が残っています。すでに引退され、来られてはいたのですが、そのことは理解できる雰囲気があります。C. R. Sirtori 教授がアポ A-I ミラノの発見者です。イタリアの片田舎の数十名の人達がアポ A-I の遺伝子変異株を有し、多くは血族結婚のためにそれが維持されていたのですが、その人たちは HDL-C やアポ A-I が欠損しているにもかかわらず動脈硬化がないことから、アポ A-I (ミラノ) 変異種を人工的に作ってヒト体内に静脈注射する発想が生まれたのです。それがアポ A-I ミラノです。動脈硬化は退縮したのですが、その臨床治験が行われたり、途中で開発が中止されたり、しかし、未だに製薬業界は諦めてなかったりと、HDL の世界は今なお混沌としています。因みに私たちが開発したのは、アポ A-I を模倣した特殊な短鎖ペプチド: FAMP (Fukuoka University apo A-I mimetic peptide) です。C. R. Sirtori 教授は、ESC や AHA など大きな学会の特別講演で、必ず私の HDL の多面的作用のスライドを使ってくれるので、以前より親しみを感じていて、一度はこの研究所を訪れたいと考えていたのです。そういった HDL 研究は現在も Chiesa 研究室の一番のテーマですが、今は腸内細菌や microbiome と HDL の関連をうまくとらえて研究しているとの Chiesa 先生のトークがありました。これは今トピックですね。さらにびっくりしたのですが、Sirtori 教授のお父上 (Carlo Sirtori) がこの研究所の設立者で、多額の寄付をしたとのこと。講義室にも Carlo Sirtori 教授の名前が刻まれたパネルがありました、その方がどのような研究をされていたかは知りません。





＜ Milan(ミラノ)の紹介＞

せっかくですのでミラノを紹介します。ミラノと言えばミラノコレクションやファッションで有名な街ですが、ドウオーモの横にはグッチやブルガリやエトロなどの高級ブランドショップが並びます。石畳の道路は歩きにくいのですが、そこがイタリアという雰囲気です。

6月のミラノは最高の季節です。空は真っ青、雲一つない、27度C程度の気温ですから熱い。ビールやワインがおいしいですね。私たちが滞在したホテルも現代的な、イタリアンモダンな感じでしたが、やはりイタリアは食べるものも日本人にあってます。ミラノの名物は仔牛 (veal) のグリルですので、毎日ステーキでした。アメリカのステーキとは違うのですが、おいしいです。



Giulia Chiesa 先生の研究室で round table discussion を行い、それが終わると、再びタクシーに乗って30分、ミラノの南の運河沿いのレストランを予約してくれてました。ミラノはアルプス側の湖からつながる運河が有名で、それを利用した交通も発達していったそうです。そのレストランでも肉でしたが、一皿料理がミラノの伝統的料理だそうで、サフランライスとお肉が一皿になったディナーでした。肉は骨付きで、その骨髓を小さなスプーンですくって食べるのですが、これは、おいしかったですね。デザートが食べれないくらい腹一杯になりました。





Associate Prof. S. Imaizumi's Commentary

Giulia Chiesa 先生とお話していると、たとえ自分の専門分野でも、広い視野のもとに多面的に見ることができる態度が養うことの重要性を感じます。同じ大学の研究者とばかり話をしていると、自分の専門分野は自分が最も良く分かっていると思いきみ、「井の中の蛙」、あるいは「蛸壺」状態になってしまい、知らず知らずのうちに視野が狭くなってしまいます。もちろん、専門分野の研究をするには、ある程度狭い範囲のテーマを深く追求するのですが、時々「井の中の蛙」から脱却して、周りを見渡す心の余裕と見識を持つ必要があると思います。そのためには、やはり海外の研究者とコミュニケーションをとることが非常に重要だと感じています。私にとっては、今回のように海外の研究者から HDL に関するお話を聞くことが、自分の仕事に幅を持たせ、多様な視点から研究することの支えになっています。特に今回は、Giulia Chiesa 先生のラボを見せて頂くことにより、研究の多様性を肌で感じる事ができ、仕事のモチベーションという意味でも非常に大きな助けとなりました。ともすると日本人は日本人同士でコミュニケーションをしたがるのですが、やはり積極的に海外の研究者と交流を取るようになっていく必要があります。これからも Giulia Chiesa 先生との交流を発展させていくだけでなく、多くの研究者と刺激しあいながら成長できればと思っています。

Prof. K. Saku's Commentary

Giulia Chiesa 先生は以前から論文で知ってました。数年前から共同研究をしていますが、私たちの論文を査読されたこともあったようで、彼女に送った1つのメールからここまで良い関係を作っています。彼女の指摘は的をたっていて、それが私たちの研究テーマを活性化していったのも事実です。今後もこの関係を継続したく思っていますし、福岡大学の若手研究者が人と交わることの重要性を実践してもらいたいと考えています。研究は与えられたことをするだけでは進化しません。働き方改革で研究できなくなった(?) 若手医師へおくりたい「言葉」です。

